

聖地のこどもニュース オリーブの木

No. 12 2004年8月



ヤッファのラサール校幼稚園部の卒業写真：ここにはユダヤ教徒もイスラム教徒もキリスト教徒もいる。国籍もさまざま、まさに平和共存のシンボルだ。

日本列島は猛暑に見舞われておりますが、皆様お元気でいらっしゃいますか。

さて、ハーグの国際司法裁判所は7月9日、イスラエルによる『分離の壁建設は国際法に違反している』との判決を下し、イスラエル政府に壁の即時撤去と壁建設で生じた損害を賠償するよう求めました。続いて7月29日、国連総会において、壁の撤去を求める決議案が採択されました。にもかかわらず『壁』の建設は続行され、イスラエルの軍事行動はとどまるところを知りません。

聖地の平和のために、皆様のさらなるお祈りとご支援を心からお願いいたします。

聖地のこどもを支える会 井上 弘子 スタッフ一同

NPO 法人 **聖地のこどもを支える会**

事務局：☎ 164-0013 東京都中野区弥生町 1-19-1-201

TEL&FAX : 03-3379-5571 e.mail : seichi@k.email.ne.jp

ホームページ : <http://www.ne.jp/asahi/seichi-no-kodomo/org>

パレスチナの子どもたちの夏休み

聖地におけるカトリック学校・学院のための連帯事務局長

ピエトロ・フェレット神父（イエスの聖心会司祭）

今、聖地は夏たけなわ、パレスチナの子どもたちはもう2ヶ月前から夏休みに入っています。しかし、政治的な状況から海や山へ遊びに行くことはできません。一日海へ泳ぎに行ったり、聖なる場所や親戚を訪ねたりしたくても、ベツレヘムやラマラやエリコから外へ出るには、子どもでさえイスラエル軍行政部の通行許可証が必要なのです。一つの町から他の町へ行くのも容易なことではなく、危険でさえあります。

このように行動の自由もなく、何の楽しみもない子どもたちのための取り組みの一つとして、この夏、数多くのクラブや修道会、また小教区がみんなパレスチナ内のあちこちでサマーキャンプを実施しています。嬉しいことに、若者のイニシアティブの精神はとても活発です。

サマーキャンプの目的は：

- － 子どもたちを、好ましくない場所やインターネットカフェや悪友から引き離すこと。
- － スポーツや読書、アートや音楽活動を通じて、時間を上手に有効に使い、自分にも他人にも役立つように用いる大切さを教えること。
- － 子どもたちに、自分の兄弟、姉妹、いとこ、近所の遊び仲間や同級生などとは別の子どもたちと出会い、仲良くする機会を与えること。

どのキャンプでも、子どもたちは最後の打ち上げパーティーにそれぞれの親を招待します。それは、キャンプ中に作成した絵や刺繍、工作品などを得意げに親に見せたり、習った音楽を演奏して聞かせたり、一緒にスポーツを楽しんだりする素晴らしい機会となります。リーダーは普通大学生か高校生ですが、大人に助けられながら、非常に綿密に計画を立て、熱心に子どもたちを指導し、パレスチナ・アラブ人としての非常に大切な価値観を教え込もうとしています。

暴力よりも平和を。

個人主義よりも協調の精神を。

復讐よりも赦しを。

自分と違う人間を拒絶するよりも受け入れることを。

時間を無駄に使うよりも有効に使うことを。

心理的、霊的、社会的に根無し草となるよりも、

一つの国、一つの民族への帰属意識を持つことを。



こうして充実した夏休みの終わりにはパレスチナの子どもたちは、自分たちが「かけ橋」の一部を建設したことに気づくことでしょう。もちろんこのかけ橋の建設はほんの始まりでしかなく、継続しなければなりません。たとえ「責任を持つ大人」(?)であるイスラエル人たちが恥辱と人種偏見のシンボルである「分離壁」の建設を続けていても、です。

日本のすべての支援者の皆さま、『聖地のこどもを支える会』は、パレスチナ紛争の現実やその中で生活する子どもたちの実情を皆さまにお話しするために、私を日本にご招待くださっていました。しかしこのたび、私の修道会の都合で、日出ずる国日本へ行くことができなくなったことを、残念に思い、心からお詫び申し上げます。この訪日は決して中止されたのではなく延期ということなので、いつかは皆さまにお目にかかると楽しみにしております。その節はどうぞよろしくお願いいたします。

分離の壁に立ちはだかる神父の奮闘

2004年6月4日 ラリー・ファタ（アメリカ人ジャーナリスト）

「やめてください！」ご受難会のイタリア人神父クラウディオ・ギラルディ師の牽制の言葉が飛ぶ。「この人たちは私の客人です。ここは私の家ですよ！」修道院の敷地をパレスチナ婦人たちが横切るのを阻止しようとしているイスラエル軍兵士にたいしてだ。彼のメッセージは明らかだ。少なくとも修道院の敷地内ではイスラエル兵のパレスチナ人に対する嫌がらせを許さないと。

兵隊たちも神父がそこにいる限り手も足も出ない。パレスチナ人たちは敷地の向こうのエルサレム側へと歩を進める。通り抜けられるかどうかは、向こうの出口にイスラエル兵がいるかどうかにかかっているが、クラウディオ神父の介入のおかげで、少なくともそこまでは行けるというものだ。

こうしてクラウディオ神父は、毎朝イスラエル兵を敷地の外に追い出すのに苦労している。彼の大きな心配の原因は、すぐ目の前にそびえているイスラエルの「分離の壁」だ。醜悪な、9 mもの高さがあるコンクリートの壁は、修道院のはるかに低い、しかし美しい石塀を押しつぶすようにそそり立っている。

現在建設は修道院の敷地からほんの数メートルのところまでストップしているが、それはイタリア領事とパチカン大使の介入のおかげである。しかしすでに多くの被害が出ている。またクラウディオ神父はこの「休戦」は長く続くとは思っていない。「これはただの塀やフェンスなんかじゃありませんよ！」と彼は語気を強める。「これはまさに国境じゃないですか、なぜ彼らは本当のことを言わないんだろう？」

ご受難会聖マルタ修道院は、ちょうど東エルサレムとアブディスとエル・アザリエ（＝ベタニア：聖書では、マルタとマリア、その兄弟ラザロの村）の接点にある。イスラエル政府は、修道院の敷地を真っ二つに分けるように壁を通そうとしているようだ。それは教会財産に関して1997年のイスラエル国とパチカンが締結した協定に違反している。ベタニア、アブディスと東エルサレムの一部の住民が、エルサレムの町と経済的に切り離されるだけでなく、この修道院の近くに住む2000人のキリスト者たちが霊的な支えを失うことになってしまう。

クラウディオ神父の聖マルタ教会には今人影はない。信者たちはこの敷地のエルサレム側にある教会へ来ることが出来ないのだ。同じ修道院でもベタニア側には入ることが出来るのに、イスラエル兵や国境警察の警官がいる時にはエルサレム側に近づくことも出来ない。彼らがパレスチナ人が向こう側へ行くことを絶対に許さないからである。ほとんどの信者はアブディスやベタニアに住んでいるが、エルサレムに入るための通行許可証を持っていない。だからクラウディオ神父はミサをベタニア側にあるコンボーニ会女子修道院で立てている。

イスラエルが「自爆テロ」をストップするために1967年の国境（グリーンライン）の内側に壁を建設する必要性について、多くの議論が行われている。

またある場所ではパレスチナ人の土地を取りこむ形で、ヨルダン川西岸地区のグリーンラインより奥深くに食いこんで壁を建設していることについて、多くの批判や非難が浴びせられている。イスラエルは、彼らがいうところの「分離のフェンス」はイスラエル人とパレス

この人たちは
私の客人だ、
ここは
私の家だ！

チナ人を引き離すのに必要だと主張する。

この壁がイスラエルの安全保障上必要だという主張を受け入れたとしよう。しかし大部分のパレスチナ人には、なぜこの地域を分断する壁を造るのかわからない。「ここにはユダヤ人はいない。だからこの壁はユダヤ人とパレスチナ人を分けるためのものではない。パレスチナ人からパレスチナ人を切り離すためのものだ」と若者エマドは言う。彼はエルサレムの住民証明書を持っているので、この修道院の敷地を突っ切って向こう側に働きに行くことが出来る。しかし壁が完成すればそれも出来なくなるのだ。

さらに、この壁はすでに弱体化しているキリスト教共同体に影響を及ぼすだろうか？ 昔パレスチナ人口の10～15%はキリスト者で、活発で健やかな共同体を作っていた。今彼らは公には2%といわれているが、現在はもう1%に近づきつつあるという人もいる。修道院の敷地の真ん中に分離の壁を建て、キリスト教の人々をその教会や司牧者たちから引き離せば、キリスト者たちの更なる海外流出を招くことにしかならない。



・・・もちろんイスラエルは、教会を追い出そうとしているという非難に反論している。しかし最近イスラエル政府の政策によって、聖職者や教会関係者のビザ取得および更新がほとんど出来ない状態になっていることも事実だ。それは、教会の使命遂行が不可能とは言わないまでも、非常に難しくなっていることであり、キリスト教共同体のさらなる弱体化を招くことになる。

「この壁は全くパレスチナ人の人権を無視していますよ」とクラウディオ神父は言う。「私有権も基本的人権もあったものではない。イスラエル政府は壁を造るために勝手に貧しい人々の土地を奪っているんですよ！」・・・

～ MIFTAH(パレスチナ平和団体)のホームページから ～

アイダ 難民キャンプ 訪問記

磯部 雅子

聖地のこどもを支える会会員

私たちは、エルサレムで起こった一つの自爆攻撃の直後にアイダ・キャンプを訪れた。このキャンプは1948年設立。住民は5000～6000人。人口は増えている。50年以上もここに住んでいるので、今はキャンプといってもテント住まいではなく、にわか造りのコンクリートや石の家がギュッと押しつけられて立ち並んでいる。国連が学校も建てた。だが80～90%の住民は何も仕事がない。誰も外に出て来ない。以前はイスラエルに出稼ぎに行っていたが、今はそれも不可能だ。

車を出てキャンプ内を歩く。いつ爆撃があるか、兵隊が来るかわからないので、皆家の中に隠れている。狭い路地は無人だった。子供が数人姿を見せ、暇そうにしている。家々の外壁には顔写真を引き伸ばしたポスターが貼ってある。「殉教者」たちだそう。その一枚。銃を持った若者の名前はアリ。自爆攻撃の殉教者。2週間前エルサレムで自爆。家がつきとめられ、イスラエル軍に爆破された。その跡を見た。

壊れたコンクリート塊の山。突き出た鉄骨。このように1000軒以上壊されてきたという。呆然と立っていると、子供たちが数人来た。瓦礫の山に軽々と駆け登る

彼らにカメラを向けると、ポスターを高々とかざす子がいる。アリの弟だ。Vサインをして笑っている。大変誇らし気だ。別の写真はリヤド。父親もすでに自爆、弟は捕らえられている。子供らはこうして殉教者たちの写真に囲まれ、憧れて育つ。

「大きくなったら何をしたい?」と問われ、にっこりして「兄さんのような殉教者になりたい」と言った。壁のスプレーの大きな落書きは殉教者をほめ賛えるアラビア語だ。いくつかの家の外壁にびっしり散っている残酷な水玉模様はマシンガンの弾痕。案内してくれた運転手さんは、爆撃された家の隣に住んでいて、爆風でこちら側のガラス窓がみな吹き飛ばされたそう。時間があれば、キャンプの人たちと話しあい、子供たちと遊びたかった。

【その日の夕べ イブラヒム神父のお話】

「今日ベツレヘムに入れたのは、イスラエルからであれ、外国からであれ、あなたたち一行の8人だけだ。今朝、ベツレヘム近郊ホサン村出身のパレスチナ人が自爆攻撃したので、警戒が一挙に厳しくなり、誰も入らせてもらえない。あなたたちは早朝出発したので危ないところをすり抜けてきた。エルサレムの集会に行っていたシスターたちは戻れないようだ。いつ帰れるかわからない。」

状況は残念ながらどんどん悪くなっている。希望はますます小さくなっている。失業率は85%くらい。お金なし、食物なし。この状況は慢性化している。ベツレヘムを囲む《壁》も建設中だが、完成すればベツレヘムが一つの町ごと大きな監獄になる。壁のない今だって既に監獄だが、今日ベツレヘムから我々が出ようとしてもかなり難しい。あなたたちは間一髪でベツレヘム入りを果たしたが、あなたたちの少し後で来ようとしたシスターたちは昼からずっと検問所で止められている。誰も、どこからも入れない状態にある。」

パレスチナでは衣食住すべて不備。親は子に食べさせてやれないと嘆く。長びく紛争のため仕事もない。「私たちは自由と仕事がほしい」ベツレヘムの父親が言った。生活は危険と背中あわせ。いつ弾丸が飛んでくるか。境界線をぐっとはみ出し、パレスチナ側に食いこんで建て回された醜悪な「分離の壁」。これが日々の生活を分断する。仕事。農作業。通学。通院。……町を村を私有地を、壁が貫く。例えば高校生の通学もチェック・ポイントで止められ、IDカード（身分証明書）を提示。黙って通されるか、カードを取りあげられるか……は当番兵士のその時の気分次第。一女教師は「どうせインティファダのことを教えるんだろう」と通されなかった。出稼ぎに行かれず失業する人たち。観光が主産業であるパレスチナの町では、おみやげ用のオリーブ細工職人や建設業の人が多く。観光客、巡礼者はほとんど来ない。製品は売れない。ホテルは閉鎖。やはり失業する。

【教皇大使サンピ大司教のお話】

「クリスマスに説教をしたが、誰も聞いてくれなかった。皆心がずさんでいて、耳を傾けることができないのだ。それで最後に言った。皆さん、あなた方の子どもたちは戦争の中に生まれ、戦争の中に育って、戦争の世界しか知らない。だから、どうか子供たちに愛を注いでください。『自分たちは戦争の中に生まれたけれど、愛の中にもまた生まれた』ということがわかるように。」

このことばは訪問する先々で共鳴して響き、また現実の形となって動いている姿も見ることができた。

振り返って、日本はどうだ。むこうの子らに欠けているもの、すべて持っている。あり余っている。しかし彼らがしっかり握っているもの——家族のつながり、友情。師弟の絆、草の根の信頼と助け合い。—日本の子らはそうしたものを見失って、荒れはてている。

豊かさの中の飢え。これが日本の焦眉の問題だった。日本のメディアは、おぞましい事件がおきるたび、危機感を煽り、小さな範囲での因果関係をほじって、堂々巡りの報道をする。テレビの前で人々は、他人事として怯えながら、世の不快な匂いに眉をひそめる。これらの事件にぴったり続いて私たちの日常があるのに。この時代、この空気は、他でもない、私たちが作りだしているもののなのに。

パレスチナの時と、私たちの時が、つながってくる。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

占領下のパレスチナの子どもたち

～2004年国際子どもの日資料（国連）抜粋～

人口統計（UNFPA, UNICEF）

- * 西岸地区およびガザに住むパレスチナ人の
子ども数・・・1,800,000人
- * パレスチナ総人口の内18歳以下の子ども・・・53%
- * 学齢期にあるパレスチナ人の
子ども数・・・1,200,000人

紛争の中で： 2000年9月以降（第2次インティファダ以降）

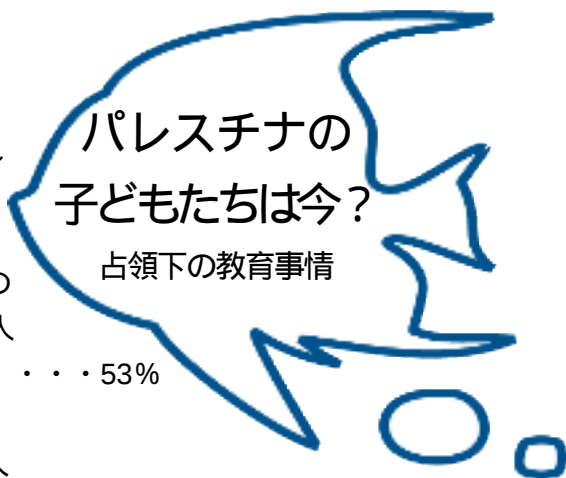
- * 670人以上の子どもたちが殺された・・・パレスチナ人 573人
・・・イスラエル人 105人

（負傷者数は数千人に上る）

- * 2,500軒以上のパレスチナ人の家屋が破壊され、6,000人以上の子どもたちが家を失った。
- * 2,000人に上るパレスチナ人の子どもたちが逮捕、尋問、拘留、投獄された。
- * 現在、337人の子どもたちがイスラエル刑務所に入れられている。

学校教育の支障 登校妨害など

- * チェックポイントで長時間待たされたり、長い迂回路を通らなければならないなど、通学の困難さのために学校は授業閉鎖を余儀なくされ、教師、生徒とも欠席率が増えている。
- * 6万人の学齢期生徒が通う西岸地区 UNRWA(国連パレスチナ難民救済事業機関)の95の学校は、2002－2003学年度に、以下のような報告をしている；



1,475日授業ができなかった。

一日平均145人の教師が学校までたどり着けなかった。

これはUNRWAの教師スタッフの9%に当たる。またこのための

UNRWAの損失額は、831,230 USドル（約9千万円）である。

教育水準の低下 学校閉鎖、通学を妨げるいろいろな障害、一般居住地域における暴力などの結果として、学力は低下している。

- * 西岸地区 UNRWA の学校では、2000/2001 年度と 2002/2003 年度を比較すると、進級率は劇的に下落している。特に；

8年生のアラビア語進級率は12.1%下落。（76.7% → 64.6%）

6年生の数学進級率は、35.1%下落。（68.7% → 33.5%）

4年生の科学の進級率は33.5%下落。（71.5% → 38%）

- * これら学校を調査した結果、UNRWA は、20%の生徒が過度の緊張状態の兆候があり、16%の生徒は学業達成率が低く、また11.5%の生徒は恐れと不安の中にあると報告している。

次世代への希望 どんな状況にあっても、子どもたちが失うことのない長所の一つは、より良い未来への希望を持っていることである。10歳-24歳のパレスチナ人青少年およそ4,300人対象の最近の調査によると；

- * 若者の58.9%の第一関心事は、教育である。
- * 13.3%はコンピューターを使い、5.8%はインターネットを使っている。
- * 91%は将来に対して希望を持っている。

8 ページにこの方々の写真を掲載しました。

紛争の中で
平和のために
働く人のことば

バチカン教皇大使 サンビ大司教

(1) **真理** どんな戦争も嘘から始まる。イスラエルとパレスチナの両方に対して、バチカンから派遣されたただ一人の大使である私が、イスラエル人と話すと、悪いのはパレスチナ人だと言い、パレスチナ人と話すと悪いのはすべてイスラエル人だと言う。双方に真理を見る勇気がなく、真理を語る勇気がない。

(2) **正義** 私は自分の権利を守らなければならない。しかし私は「相手の権利も守らなければならない」ということを知らなければならない。自分の権利を守ろうとするなら同時に相手の権利をも守らなければならない。

(3) **愛** 戦争を始め、それを続けるには「憎しみ」が必要です。互いに反目させて、戦わせるには、憎しみを作り続ける必要がある。戦争を止めるのは愛しかない。

(4) **自由** 自由の中に人間の尊厳を見いだすことができる。責任感も未来を造るための創造性もそこにある。抑圧された民族には憎悪と復讐しか考えられなくなる。

ミシェル・サバ

エルサレム総大主教

『希望を失わず、聖地のために祈ってください。そして皆さん来てください！皆さんが来ることは、ここが戦争の場ではなく、祈りの場であることを示すことになるからです。』

ジョージ・サアデ

ギリシャ正教の学校の校長。

2003年3月25日ベツレヘムの町を車で走行中、イスラエル軍の銃撃の巻き添えで娘クリスティーナを失った。自身も9発の銃弾を受けた。『わたしは彼らを赦し、娘の死を受け入れます。辛い状況だが、わたしは希望を失わない』